

ウィメンズ・ヘルスは産前・産後のさまざまな身体変化に対する対処をはじめ、骨盤臓器下垂・脱、失禁、乳がん手術後の浮腫などライフステージに応じた健康および疾病管理がその内容である。女性特有の問題に対して女性の理学療法士が積極的にかかわる場面が増えてきた。業務内容のなかには、アライメントや筋収縮の促進などの運動指導をはじめとした、理学療法士にアドバンテージがある内容が多い。理学療法分野のなかでも将来大きなポテンシャルを有し、期待が大きくなおかつ女性セラピストのモチベーションにもつながる領域である。

■産婦人科の現状と要求される理学療法士像（塩津英美論文）

婦人科手術においては、女性の社会的活動の領域の広がりとともに美容的観点のみならず早期の機能回復・社会復帰を可能とする手術の低侵襲化、さらには術後後遺症の改善が大きな課題となっている。本稿では、近年の婦人科悪性腫瘍における手術侵襲低減の流れを外観するとともに、特に術後の日常生活に支障を来すことが問題となっている膀胱直腸機能障害とリンパ浮腫を取り上げ、その対策と当院の取り組みを紹介する。

■女性のライフサイクルと心身の変化—性差を加味した解釈と理学療法（石井美和子論文）

女性はライフサイクルによって心身が変化する。性成熟期では、性周期に伴って心身の変化が生じるため、周期的に身体の不調を再発する場合は性周期との関連性を考慮し、介入時期や内容を検討する。更年期・老年期では性周期に伴う心身の変調はなくなるが、性ホルモン分泌低下に伴う心身の変化が現れる。また、日常の姿勢や動作も身体的な影響を生じる因子の一つであると考えられる。

■骨盤臓器下垂・脱に対する理学療法（田舎中真由美論文）

骨盤底筋群の機能不全により生じる骨盤臓器下垂および脱の問題は直接生命を脅かすものではないが、生活の質を著しく低下させる。本稿では、骨盤臓器下垂・脱がなぜ生じるのか、その原因と症状を確認するとともに、超音波画像診断装置を用いた恥骨結合評価、骨盤底筋群の機能評価および腹圧上昇課題時におけるコアの評価方法、さらには評価に基づいたコア機能向上のためのアプローチを紹介する。

■腹圧性尿失禁と理学療法（磯脇まゆみ論文）

腹圧性尿失禁は、骨盤底筋群の弱化为原因として考えられている。ローカル筋である骨盤底筋群のダメージが排泄機構に問題を生じながら、腰痛・骨盤痛に影響することがわかっており、理学療法士を必要とする新たな分野として今後発展するものと考えている。本稿では、骨盤底筋群のトレーニングを行う際に考えること、知っておくべきことなど、基本的要素を中心に評価・治療に至るまでを自らの経験をもとに紹介したい。

■出産と理学療法（布施陽子論文）

妊娠に伴う姿勢制御破綻から腰痛等のマイナートラブルが引き起こされる。今回、筆者が取り組んでいる妊婦を対象とした理学療法の展開を紹介するが、内容としては通常行っている評価・治療が主である。しかし、妊娠による身体変化は大きく、妊娠経過に伴うリスク管理等の知識は必要である。本稿では、女性の一生涯のうち身体変化の著明な妊娠期間の理学療法を述べ、この時期の理学療法を、妊娠中だけでなく、産後の生活がより良いものとなる位置付けとして紹介したい。

■産前・産後のかかわりと臨床の評価基準（福岡由理論文）

妊娠、出産は病気ではない。しかし、出産は女性の一生の中で大きなターニングポイントとなる身体変化であることに変わりない。昨今、妊娠中の急激な体重変化と骨盤を中心とした身体変化ばかり取り沙汰されているが、産前・産後の身体変化は他にも多岐にわたる。産前・産後における全身の身体変化を理解し、理学療法が展開されていくことで産科に対してもより良い医療を私たち理学療法士も提供できるはずである。その一助になればと願う。

■リンパ浮腫と理学療法（満田 恵論文）

近年がんサバイバーの増加により、がん治療後の後遺症のひとつであるリンパ浮腫への治療がわが国でも積極的に行われつつある。適切な治療が遅れると症状は徐々に進行し、ADLやQOLの低下を引き起こす可能性があるため、早期からの治療開始が必要とされる。本稿では、理学療法士が対応すべきリンパ浮腫に対する理学療法の現状と、今後の課題・展望などについて考察する。